

座談会

コーディネーター

佐藤 信（東京大学名誉教授）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授を経て、東京大学大学院人文社会系研究科教授。のち、大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事。現在、東京大学名誉教授。著書は『日本古代の宮都と木簡』『出土史料の古代史』『古代の地方官衙と社会』『列島の古代』（日本古代の歴史6）『古代史講義』など多数。専門は日本古代史。博士（文学）。

参加者

吉村 武彦（明治大学名誉教授）

亀田 修一（岡山理科大学生物地球学部教授）

溝口 優樹（中京大学教養教育研究院講師）

村崎 孝宏（熊本県立装飾古墳館長）

熊本大学大学院文学研究科修士課程修了。熊本県教育庁文化課課長補佐、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」館長を経て、現在熊本県立装飾古墳館長。

亀田 学（歴史公園鞠智城・温故創生館）

佐藤

第一部で、4人の報告者の方の大変要を得たお話を伺っていて、話がなかなかうまくみ合っているのではないかと思いました。このあとの座談会も期待しております。

これから1時間くらい、討議をさせていただきたいと思います。

話の一つは「考古学からみた古代山城・鞠智城と地域社会」のお話。二つ目のテーマは「古代史からみた古代山城・鞠智城と地域社会」という話を討議していただきます。三つ目は、「鞠智城と肥後の地域社会」ということで、これからの調査研究の課題のようなお話にまで進みたいと思っています。

ここからは、最初にご挨拶していただいた、熊本県装飾古墳館長の村崎さんにも参加していただきますので、自己紹介をお願いします。

村崎

こんにちは。熊本県立装飾古墳館の村崎です。冒頭でもご挨拶させていただきましたが、二部にも参加させていただきます。今回、「地域社会からさぐる古代山城・鞠智城」というテーマを設けさせていただきました。鞠智城のこれまでのシンポジウムでは、発掘調査で何が分かったかを発表させていただいております。具体的に菊池川流域ですとか、肥後国ですとか、そういう地域の中で鞠智城がどのような役割を果たしたのか、あるいは大宰府とどうつながっていたのかをより具体的に探っ

いくためには、もう少し身近なところもテーマとして明らかにするべきではないか、ということを考えまして、今回、佐藤信先生とご相談をさせていただいたところです。

築城に関する考え方としては、いくつかこういう理由があるんじゃない、ということをして、これまでの先輩方が発表されています。今回、吉村先生のお話をお聞きし、目からうろこ言いますか、なるほどそう考えれば理解できるのかと、少し光が見えたように思います。鞠智城の調査成果は、5期に時期区分をしております。その中で土器の出土量の増減や、遺構の変遷など、いろんなところが少しずつ分かってきたんですが、それがどのように歴史の中で位置づけられるのか、見ることでできるのか、というところまでは具体的な整理ができていなかったように思います。その中で、時代の変遷、流れとともに役割が徐々に改変していく。当初言われていた考え方も、それぞれの面で考えると正しいということも言えるのかもしれないと。

それから、亀田修一先生のご発表の中の、鬼ノ城の築城にかかる技術や、直接それに関わる集団のお話なども、今後、鞠智城の中でしっかりと見ていかないといけないということを痛感しました。勉強させていただければと思います。今日は短い時間ですが、よろしくお願いいたします。

佐藤

ありがとうございました。それでは、これから座談会に入りたいと思います。

今、村崎さんのお話にありましたように、第一のテーマは考古学から見たというところに焦点を当

てております。全体としては、考古学・古代史の両方から鞠智城の歴史的な意義について、連携しながら迫りたいというのが今日の座談会の主旨です。

最初に「考古学からみた古代の山城・鞠智城と地域社会について」です。今日は主に、亀田修一さん、亀田学さんからお話をいただいたわけですが、これについて古代史の方から質問などありましたら最初にお願ひしたいと思います。

吉村

配布されている資料にあるのですが（資料編36ページ）、今回期せずして、筑紫との関係で鞠智城を考えようということで、私もそれに賛成なんです。ここで一つ問題になるのは、肥後国がいつできたのか、建国された時期です。これは難しい問題で、早く考える人では孝徳朝の大化改新時を想定する人もいるかもしれない。遅い人は天智朝くらいですかね。あるいは、もう少し下がって天武朝ですか。その場合、鞠智城の方が早く造られたということになるかもしれない。

肥後国と鞠智城が、どちらが先に造られたのか、それなりに問題になります。それはともかくとして、肥後国において、大宰府・筑紫城という防衛体制の中で、どのように立地させるのか。鞠智城をどこに設置するのか。また防衛の観点からしますと、国府は別の箇所には造らないと、同じ場所だと同じ時にやられてしまいますよね。そういう意味では、肥後国府は変遷がありますけれども、かなり離れていることは、いい配置かと思うんです。

亀田修一さんがに書かれているのは（資料編21ページ）、白村江以前に渡来してきた人たちと、古代山城との築造の関係を説いておられますね。これを読ませていただいて、こういうことであれば、防衛体制の建設はよく理解できると思っただけですが。

要旨のところにはあまり出てこなかったのですが、ミヤケがヤマト王権直轄の施設かどうか、そこまで言い切れるかどうかは疑問なんです。非常に関係が深いことは事実です。溝口さんも言われたような、筑紫国造と鞠智城の場所との関係とかは、少し考える必要があります。いずれにしても大宰府の関係で、鞠智城の立地が考えられたということは、非常に説明しやすいと思います。もう少し詳しくお話しいただければと思います。

佐藤

今のお話では、六世紀前半の筑紫君磐井の戦いの時代は、肥前、肥後には分かれていなくて火国だったということになります。お隣は筑紫国だった。それが律令制的な国制が敷かれる段階で肥前、肥後に分かれる。その時期は、一般的には七世紀後半と考えられているわけです。それが鞠智城の築城期、六六三年の白村江の敗戦の直後に作られたとした場合は微妙な関係になるということです。火国だったかどうかということも含めてですけれども。

その場合、今日のお話は肥後を中心としておられたのですけれども、肥前も火国という形で一体だった可能性もあるかなと思います。その点について、お考えがあれば亀田学さん、いかがでしょう

か。

亀田（学）

肥前地域についてはあまり詳しくないので言えないんですけど、私が、七世紀後半の白村江以前と言ったのは、文献史料に築城記事がないということと、古墳時代の前半から後半にかけて、中心地域の背後になるので、古墳時代の資料の分布から、それ以前にあつてもいいんじゃないかと考えたからです。鞠智城をなぜここにしたのか、その辺に関わる資料かと思いました。先ほど、吉村先生からご指摘いただいた、いろんな考古資料を使って、どこまで遡れるかという点なんです、なかなか難しいところです。六世紀後半から七世紀後半までのいい資料がなく、その間、なるべく古くできないかと個人的には考えています。

佐藤

今日の溝口さんの話にもあつたように、火君という氏族自身もいくつかの地方豪族の連合体のような形で考えたほうがいいということになります。おそらく火君が火国の代表的な地方豪族という形ですが、その中身は連合体的だったということで、私も勉強させていただきました。そうすると、肥前と肥後にどう分かれていくかということも含めて、肥後国がどういう勢力から形成されるかということもあります。この点について、考古学のお二人、亀田修一さんと村崎さんは、お考えは何かありますでしょうか。じゃあ、村崎さん。

村崎

肥後国が成立する前にどういう形で、ということになると、なかなか答えとして難しいです。ただ、亀田（学）が言いましたように白村江の戦いの前からあつたのではないかという考え方は、これまでも言われた方がいらつしやったと思うんです。遺物の中に、貯水池跡からだったと思いますが、七世紀の第2四半期後半くらいの遺物が出ています。そういうこともあつて、築城期を第3四半期の半ばくらいにもってくるのは少し難しいのではない、もう少し早くあるんじゃないかという意見を言われていた方もいらつしやいます。それは物からの話です。その関係で築城の記録が抜けているのではない、といった解釈をする方がいらつしやったのも事実です。ただ、それ以外に、確実に考古資料の中から築城時期に関わる資料は現在のところ見つかりません。傍証程度の話ということになります。

佐藤

九州におけるヤマト王権の勢力を代表する筑紫大宰の在り方自身も、まだよく分かっていないこともあります。さらにそのもとでの、火国、あるいは肥後国の様子というも、考古学的にも古代史的にもまだまだ課題だと思います。

続きまして、肥後の勢力を古墳のほうから亀田学さんに説明いただいたんですけども、もうちょっとご説明いただけないでしょうか。お話の中では、鞠智城の領域、菊池郡地域にはなかなか有力な

古墳、地方豪族勢力はなくて、むしろ筑後の筑紫君の勢力だとか、あるいはヤマト王権の直接的な関係がそのすき間に入ってきているのではないかと私は伺ったのですが、どうでしょうか。

亀田（学）

はい、そういうふうを考えております。木柑子フタツカサン古墳とか、そういう有力な古墳が六世紀後半にあるんですけれども、菊池川の左岸にあります。そういうことも考えると、鞠智城の地域にはそれほど有力な勢力はなかったというふうに考えています。

佐藤

菊池川の右岸には、そういう有力な古墳を営む勢力はなかった、ということでしょうか。

亀田（学）

全くないわけではないんですが、中流域、下流域などの他の地域に比べてには、有力な古墳がない。袈裟尾高塚古墳の時期にはやはり中流域、下流域にもっと有力な古墳がありますし、石屋形を採用する古墳でも家形を採用するような有力な古墳があります。それでもやはり円墳です。

佐藤

私は、菊池川の河口部はラグーンがすごく発達していて、当時の海岸線はもっと内陸まで来ていて、鞠智城にかなり近いところまで来ていた。例えば、江田船山古墳とか、あのあたりの古墳群も割と近接した場所ではないかというイメージがありました。そこまでは言えないということでしょうか。

もう一つ言ってしまうと、八世紀の奈良時代でも、筑後川流域というのは九州を代表する穀倉地帯で、もっとも生産力が高かった。九州の中でも、肥後国が一番生産力が高いことは史的にも確実なのですけれども、それを支えた生産基盤として、菊池川流域の重みはすごく大きくて、これは江戸時代でもそうだと思いますが、その地域を握った在地の勢力が強いのではないかという気がするのです。そのへんはいかがでしょうか。

村崎

答えになるかどうか分らないんですが、江田船山古墳の石棺の形式、横口式家形石棺を直葬しているんです。この横口式家形石棺が、この地域に突如として出現するんです。同様の形態、形式のものとしては、福岡県の石人山古墳の石室の中に置かれた横口式家形石棺があるんです。それと同形のものということになります。清原古墳群の中で、江田船山古墳の次に作られる前方後円墳が塚坊主古墳です。その塚坊主古墳の中には横口式家形石棺を平入にした石屋形を安置する形になります。家形石棺が、石屋形に変化をしながら、三角文ですとか円文、菱形文、いわゆる直弧文の崩れたような装飾を持つものがそこに新たに作られてくるんです。ですから筑後地方との関係性もありながら、宇土半島基部で見られた直弧文の影響も見られ、それが、菊池川流域の上流に移っていくと考えたときに、首長的な勢力が存在しないということでは、多分ないんだろうと思います。

江田船山の副葬品にも冠や、靴、耳飾など、大陸系の遺物の存在も、他の地域との関係性を十分に

伺える資料です。そういう意味での古墳文化が、下流域からどんどん上流域の方へと動いていくという事なのかなと思っています。ただ、亀田（学）が言ったように、鞠智城周辺に大規模な前方後円墳が存在しない、造られていないというのも事実です。

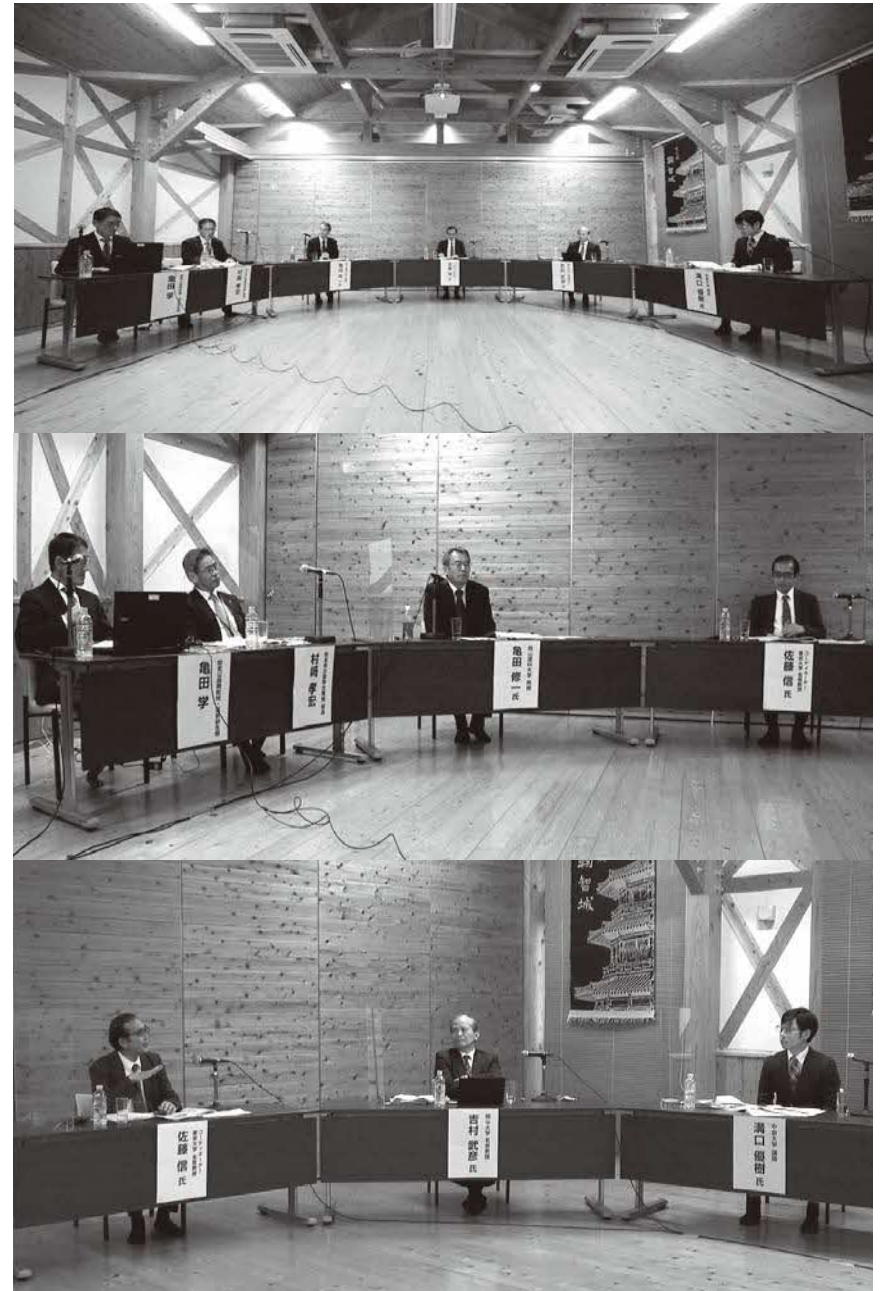
佐藤

今日は、亀田学さんと溝口さんで、筑紫君と肥後の地方豪族が結構密接につながっていたのではないかとこのお話がありました。私は江田船山古墳の副葬品に百済の遺物が直接入ってくるような密接な関係を持っているということと、磐井の戦いの筑紫君磐井のほうは、新羅と密接な関係を持っているというのが文献に書かれているので、割と、磐井の戦いの時には少し対立があったのではないかと。筑紫君の勢力と火君の勢力は、百済と新羅との関係上スタンスが違うのではないのか、というイメージを持っていました。そのへんは、考古学的には必ずしもそうではないと思ってよろしいでしょうか。これは、亀田修一さん、いかがでしょうか。

亀田（修）

まず、磐井が新羅と関係があるということは記録に出てきます。僕個人としては当時の北部九州、熊本も含めて、別に、新羅と仲がいいから百済と悪いというわけではなくて、いろんなところとお付き合いをしていると思っています。

先ほど、亀田学さんが出された資料の中に、国立歴史民俗博物館の高田貫太さんが以前書かれた耳



飾の論文の図（資料編62ページ図9）が出ています。白い丸と黒い丸と、それから三角があります。これを見ますと、白丸は大加耶系、黒に塗りつぶしている丸は百済系で、三角が新羅系です。ご覧の通り、新羅が入っていますのは2番と4番ですね。福岡県糸島市の陣内古墳と田川郡香春町の長畑1号墳ですね。それから、白い丸が大加耶系ですが、これが一番多い感じですね。そして地元熊本県の江田船山古墳と大坊古墳で百済系と言っているものが出ています。このような在り方をしていますので、きれいに割り切れる状況では、福岡も熊本もないのかな、と僕は思っております。ですから、先ほどのいろいろな関係に関しても、重層的で多様な関係を意識するほうがいいのかなと思っております。

佐藤

考えてみると、『日本書紀』筑紫君磐井の記事の中でも、高句麗、百済、新羅、加耶の諸国からの使者を全部自分のところに誘致したという記事があります。外交関係というのは単線の関係ではなくて複線の関係であった。

その場合、亀田修一さんにお伺いしたいのは、熊本の地方豪族の場合、百済の遺物がそのままやってくるような関係というのは、有明海経由の交流と考えてよろしいのでしょうか。

亀田（修）

それは素直にそう思っております。佐賀県のおつぼ山神籠石や福岡県の女山神籠石などの古代山城の話をする時に、有明海ルートを無視することはできないと思っております。佐賀県南部地域は古墳時

代からずっと有明海ルートが生きているんだというふうに思っております。

佐藤

今日亀田学さんのお話にもありましたが、磐井の勢力圏では石人・石馬文化があって、ある時期だけ、それが阿蘇の溶結凝灰岩を使っているという意味では肥後国と深い関係があると私は思っています。一方で、磐井の戦いが収束した後は、畿内由来の埴輪の文化になっていくと理解しています。考古学の方に伺いたいのは、今日のお話の中での埴輪のご説明というのは、そういう、私が思っているようなことは、単純にそうじゃないということになりましかうか。関係を教えていただけますか。

亀田（学）

磐井の乱と考古資料の関係は非常に微妙なんです。石製表飾というのは木柑子フタツカサン古墳でも六世紀後半ぐらいまで残りますので、一概に磐井の乱から画期になるというだけではないと思うんです。六世紀前半の時期だと中村双子塚古墳という多様な埴輪が出土するものもありますし、石製表飾しかないという古墳もありますので、磐井の乱で一気に区分されるというような感じの出土状況や時期ではないというふうに考えていただけたらと思います。

佐藤

磐井の、六世紀前半の戦いの後、だいぶ九州の豪族間の力関係が変わる可能性がないか、というような意見については溝口さんいかがでしょうか。

溝口

葛子なんか史料に出てきますけど、案外、勢力図が変わるといってもいいのかな、という気はしています。ただ、今回の要旨報告からいくと、配下においていた渡来人集団なんかは、取られるというか、王権のほうに割き取られてしまったのかな、という気はしています。

佐藤

外交権なんかも取られるわけですね、ヤマト王権にね。

溝口

そうですね。屯倉を献上することによって、拠点はかなり少なくなっていくということです。

佐藤

磐井君も、単純な一元的な存在じゃなくて、いろんな勢力の集合体と見れば、それがすべて潰え去るわけでもない、というわけでしょうかね。

溝口

だと思います。

佐藤

分かりました。ありがとうございます。今のようなお話について、吉村さん、いかがでしょうか。

吉村

考古学の方は、たとえば古墳があると、氏族の政治的拠点と考える方がいます。はたして政治的拠点や氏族の本拠地でしょうか。僕は、奥津城といいますが、葬送の地だと思っています。本拠地は王宮ですので、古墳の立地とは完全に区別すべきです。

たとえば国府が、どこに設置されるのかという問題を考えます。房総地域は、小国造が支配する地域と言われています。そして国造の喪葬地である古墳の場所が分かっています。下総の国府は市川市にあります、なぜ市川なのか少し考えました。下総地域では、下海上国造、印波国造、そして千葉国造の3国造がいます。それぞれ墓域があります。国造が生存した政治的拠点ではなく、あくまで墓地です。

ところで、下総国の中心地はどこかという点、この市川です。国府台の南端の方に位置しています。おそらく武蔵国との交通を配慮して、今の市川市に国府も国分寺もできたかと思っています。

武蔵国の場合は、秩父国造を別にしますと、武蔵国造は大国造と言われています。北の方には、埼玉県行田市に稲荷山古墳がある埼玉古墳群があります。古い時期の荒川の流域にあたります。南の方は多摩川と、鶴見川の流域に古墳群があります。古くは東山道に所属するので、北の方の毛野の影響が強いところです。国府はどこにつくられたかという点、いわば中央にあたるという点、今は府中市という府中の名前が残っている場所にあります。国分寺は、日本の中で唯一国分寺市という市名を名のっているところです。

意外と、それ以前の政治的拠点である場所に、国府や国分寺が造られるわけでは必ずしもありません。下総国の場合は、3国造ですが、それぞれの国造の拠点から離れたところに造るという現象がありました。

鞠智城の場合、鞠智城が早いかな、肥後国の建国が早いかなの問題があります。そして肥後国では、鞠智城と国府の建設をどこにするのかが、問題になります。これは考古学による発掘調査を待たなければなりません。鞠智城の立地としては、大宰府と筑紫城との関係からいえば、鞠智城は大宰府の近くの北の方にしますね。北部といっても、海寄りではないのですが、交通の要所にはなりません。

今日は亀田学さんから、古墳の在り方と集落などについて報告がありました。しかし結局のところ、いわゆる豪族居館についてはなかなか難しいですね。豪族居館が見つかって、その近辺に鞠智城ができるのなら分かりやすいのですが。むしろ、それ以前の政治的拠点がある場所に造られるのも分かりやすいです。しかし、国府などは、下総や武蔵国もどうも拠点とは無関係です。

今日はまた、古墳の所在地と集落の話がありました。豪族居館は、いずれ見つかりませんか。古い寺院についても、まだよくわかりませんね。福岡の小郡市では、初期の評衡遺跡や寺院跡が見つかっています。鞠智城周辺でも、寺院が見つかれば政治的拠点に近いと想定できるんですが。ただし、古墳の分布だけからは、どうも拠点とは関係しないのではと思います。

佐藤

国府の下郡レベルでの郡家、郡衙みたいな存在もちょっと間に入れて考える必要があるかもしれませんが。これは、地域社会の考古学的な解明が進めば分かってくるだろう、ということだと思っております。

吉村

ただ、郡家の推定地は、ちょっと南の方ですよ。それから郡名寺院、この名称は郡寺とか色々ありますが、郡名寺院もあります。

佐藤

郡家については、菊池郡の郡家について亀田学さん、いかがでしょうか。

亀田（学）

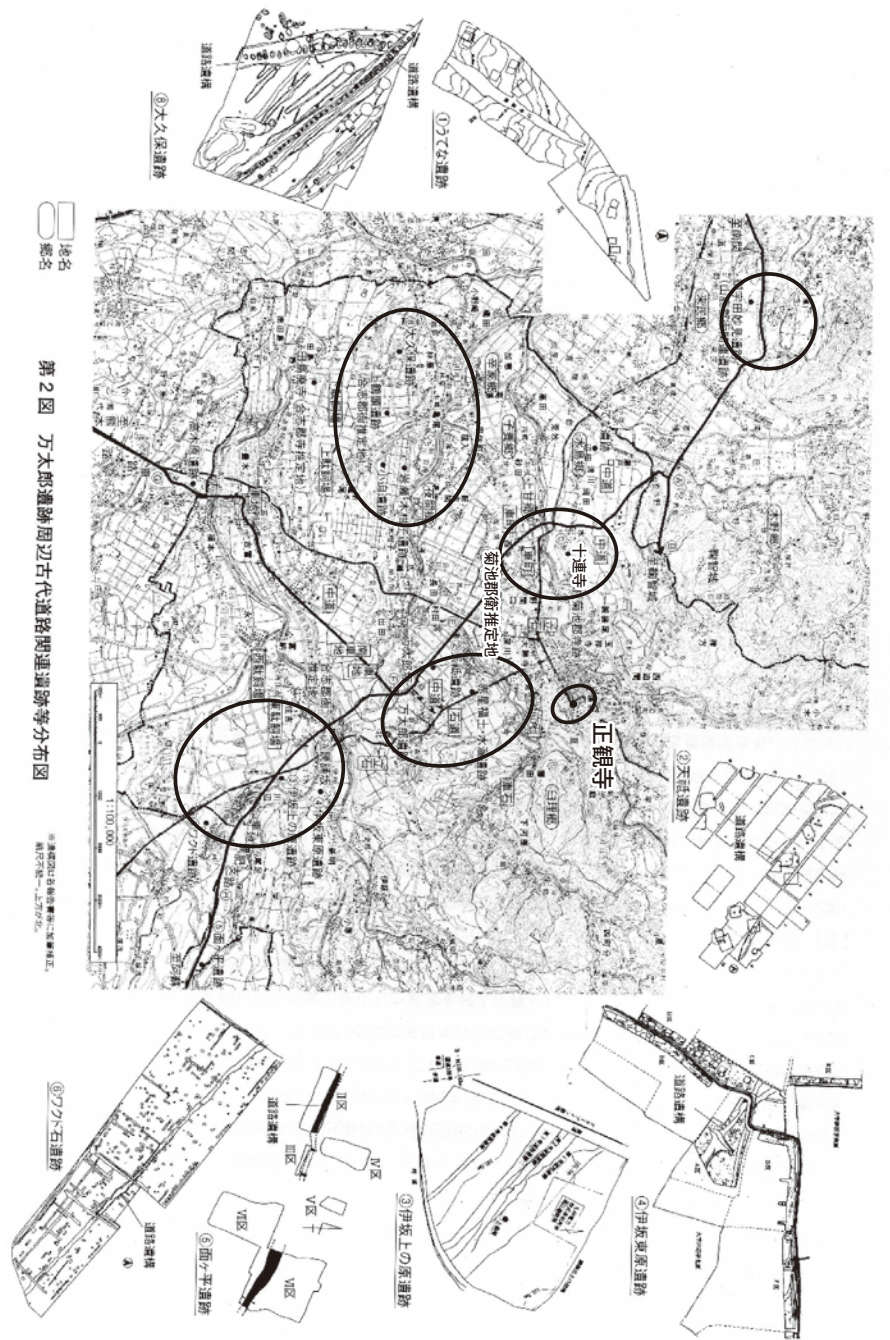
南側に、菊池川流域にありまして、過去の調査で一部確認されているのですが、土塁状に少し残っているところが、推定地域になっているんです。瓦も出土しています。

佐藤

郡の寺は確実ですよ。

亀田（学）

これが鞠智城で。菊池川があつて、流れているんですけど、西側に西寺遺跡という郡衙の、郡家推定地、郡衙推定地があつて、その北側にと十蓮寺とふという郡寺推定地があります。



鞠智城周辺古代遺跡等分布図（菊池市教育委員会2010）

佐藤

塔心礎でしたか、残っているのは。

亀田（学）

現在、心礎だけ残ってしまって、伽藍も推定はされるんですけど、不確かなところもあります。西原遺はさっき言いましたけれども、土塁状の部分が残っているところがあって、瓦の散らばり方から見ると、少し南側まで、その推定地よりひろがっていますので、中世の居館に（再）利用されているかもしれません。なんとも言えないんですけど。古代の瓦がたくさん出ていますので、周辺を含めて菊池の郡衙推定地としていいと考えています。

吉村

土塁といわれましたが、中世になるわけですか、古代ですか？

亀田（学）

そこがちょっと分からないんですね。

吉村

古代で土塁があるのは、珍しいですね。

佐藤

土塁状の高まりが残っているという・・・。

亀田（学）

土塁状の高まりですね。

佐藤

これは、地図で見ると、陸上交通路と菊池川の水上交通の交点みたいな場所だと思ってよろしいのですよね。

亀田（学）

そうですね。ここら辺は官道とかいろいろ出てくるんですけれども、ずっと大宰府の方へ向かう車路とかの推定地には近接していますね。

佐藤

菊池川か、その支流が近くにありましたよね。

亀田（学）

菊池川ですね。

佐藤

菊池川の水運との関係もあるかなと。こういう地図でだんだんと地域社会の姿がわかってくると大変ありがたい。特に、豪族居館が分かってくると大変ありがたいと思います。

さて、時間が経ってしまいましたので、次の章、第二のテーマ「古代史からみた古代山城・鞠智城

と地域社会」に移りたいと思います。これについては、考古のご報告の方から古代史の方に質問はございませんでしょうか。じゃあ、亀田修一さん。

亀田（修）

溝口さんにお聞きしたいと思います。先ほど、この地域の人々の名前、数はさほど多くはないのですが、鞠智城周辺域、菊池郡などのグループは、筑紫君グループの可能性があるというお話だったと思います。つまり火君とっているのは熊本県の南部地域で、こちらは別のグループという見方ができるということでよろしいのでしょうか。

溝口

氏族の分布のあり方みたいなものも、領域的に、ここからここまでがこのグループ、というようなあり方ではなくて、例えば、火君と結びついているグループとか、筑紫君と結びついているグループが、モザイク状にバラバラと点在しているような、そういうあり方もあるかとは思っています。現在確認できる史料から見ると、筑紫君氏との結びつきというのが見えてきます。それに対して、火君氏と地域の氏族の系譜を見ると、火君氏の分布はどちらかというと少し南の方に、八代郡のほうに下るといふことになります。

亀田（修）

そうしますと、先ほど亀田学さんの話と、佐藤さんの話、考古資料と文献史料のお話が、それなりに整合性も持ってきますね。そうしますと、鞠智城の見方って変わってきますよね。

佐藤

大伴部氏については、溝口さんは大伴連氏、のちの大伴宿禰、ヤマト王権を構成する有力な大伴氏の系統ではなくて、膳臣大伴氏の系統だと言われた。これは祖先伝承から言われたと思います。これについては、大伴連氏系ということはまったく考えられないかということを、先ほど吉村さんとも話したのですけれども、いかがでしょうか。

溝口

肥後国には、実は両方の大伴部がいます、火葦北国造^{ひのあしきのくのくみやつこ}、これは鞆部^{ゆげい}というのが姓に付いていると思うんですが、おそらく、中央の大伴連氏につながる。我が君大伴連ってありますよね。金村のことを我が君っていうふうに呼んでいますので、明らかに大伴連氏の配下にあるということが言えると思います。なので、菊池郡の大伴部がどっちか考えないといけないんですけれども、いろんな傍証を見ていくと、どちらかというところ、膳臣系の可能性が高いと。傍証とは何かというと、発表の方では少し省略したんですけれども、例えば日本書紀の持統四年の記事で、百済を救援に行った時の役で、捕虜になった大伴部博麻^{おおもつもの はかま}という人がいまして、その博麻は唐の人の計画を報告するために倭国に帰ろうと

するんです。お金がなくて、着るものや食べるものがないということで、大伴部博麻は自分の身を売って着るものや食べるものに変えて、土師連富杼^{はじのむねはこ}や氷連老^{ひのむねおや}とかを倭国に帰したという人です。一緒に帰った中に、筑紫君薩夜麻^{さくしきみ さつやま}という人がいます。これはすでに指摘されていることなんですけれども、おそらく、この大伴部博麻という人は、筑紫君薩夜麻の配下にあった。だからこそ、自分の身を売ってまで彼らを倭国に帰した、ということが言われています。そういう史料からすると、筑紫君氏の配下に大伴部氏がいる、ということが言えると。

それからもう一つおもしろいのは、風土記なんですけれども、築後国風土記の逸文ですかね。磐井が、乱の後に、豊前国の、上膳郡に逃げたという話もあります。実はその上膳郡というところも、「みけ」という郡の名前から察せられる通り、膳臣大伴部に関わる地域で、実際戸籍なんかを見ると膳臣大伴部姓の人なんかが見られます。おそらく、その地域も、磐井、というか、筑紫君氏の配下にあるような地域で、だからこそ、そういうところに逃げた、本当に逃げたのかどうか分かりませんけれども、そういう話が出てきたんだらうというふうに思うんですね。おそらくこの菊池郡のあたりというのも、そういう筑紫君氏の影響が及ぶエリアの中に収まってくるんじゃないかと、そういうふうに考えております。

吉村

ちよつといいですか。火葦北国造刑部鞆部阿利斯登といっているわけで、大伴部は名のついでない

のです。半島に出かけていくのは、大伴金村による半島政策の中で、指示されて行くんですね。金村を「我が君」と呼んでいるので、ある種の君臣関係ができていくわけです。でも、けっして大伴一族ではないです。刑部軻部ですから。このあたりが、どのようになっていくのでしょうか。

この時期は、配下の豪族に指示して行かせることができますね。確か宣化紀に、那津官家を整備する際、各地の屯倉から米穀を運ばせまね。天皇だけではなく、蘇我氏が配下の豪族を使って運ばせる記事があります。そういう意味で言うと、火葦北国造と大伴大連とが強い関係にあることは間違いない。氏族的にどういう関係なのか、もう一つワンクッションがほしいと思います。

佐藤

大伴連金村は、朝鮮半島との交渉に活躍するヤマト王権の有力豪族ですので、その過程で火葦北国造がそのもとで活躍しているということがある。また、日羅という、火葦北君の豪族は、百済王の外交顧問にまでなるといことで、火葦北君が国際交流の中で活躍したということもあるので、大友氏の影響力があってもいいのかな、という気はするんですが。

大伴部をどう考えるか。実は関東地方にも大伴部はいっぱいて、これが膳臣系の大伴部なのか大伴連系なのかということは議論になる。両説がありうる、という場合もあるのですけれども。一時期は、物部氏の前には、大友氏がヤマト王権の中で最も有力な氏族だったわけですので、そういう時代に影響力があってもいいのかな。また、膳臣氏も一時期、北陸の高句麗関係の記事の中で、膳臣氏が

活躍する。大王から派遣されて活躍する記事が『日本書紀』にありますので、必ずしも食膳を担当するというだけではなくて、外交関係で活躍してもいいのかもしれません。いずれにしても、ヤマト王権を構成する有力な中央豪族の勢力がこの地に及んでいたということは間違いないのかなと。それを厳密にどう見ていくのかということかと思っています。

ただ、今日のお話だと、亀田学さんの考古学的な検討で、少なくとも熊本県北部地域が筑紫君とかなり連携した関係にあるというお話と、溝口さんのお話がリンクしたというのは、大変おもしろいのではないかと思います。それをもうちょっと証明できる形で調査や研究が進むとまた違ってくるのかな、と思いました。

ほかにいかがでしょうか。古代史のことについて、考古学的な知見とつきあわせて、それをどう認識するか。今の、膳臣氏大伴部と見るか、大伴連氏の膳臣氏と見るかというのも、ちょっとした傍証から詰めていかなければならないわけですけども。なかなか、古代史の方も苦しいし、考古学のほうも、モノだけでは言えない面もあるかと思っています。ただ、今日のお話で一番おもしろかったのは、それがつながっていきそうな予感がする、というところでした。そういう点で村崎さん、いかがでしょうか。

村崎

磐井の勢力とつながる傍証がほかにないか、と言われると、繰り返になりますが、江田船山古

墳の横口式家形石棺の形態が、石人山古墳の石棺と同系なんです。その石人山古墳の被葬者は、磐井の祖父にあたるという推定がなされていますので、そういう意味では、筑紫君の勢力が磐井の二代前の段階に、菊池川の下流域に厳然とあつたということの証明になるのではないかと思います。

佐藤

今のお話で言うと、江田船山の主というのは、磐井、筑紫君とも密接な関係を持っていたけれども、一方で、典曹人として大王と非常に密接な関係を持っているわけですね。そうすると、今日亀田修一さんからお話がありましたけれども、各豪族が、対外的に新羅と関係があるだけではなくて百済とも、高句麗とも、加那とも、それぞれ対外的に連携していた。有明海に面したところはどこもそうだと。それと同時に、ヤマト王権ともリンクするし、お隣の、九州を代表する強大な筑紫君ともリンクするということで。そういう意味で一元的に見てしまうとまずいのかなという気もしました。それは、吉村さんいかがでしょうか。

吉村

筑紫君磐井の時に、筑後国風土記は別ですが、日本書紀によると近江毛野が、新羅に侵略された任那の国を復興するため、筑紫に来ます。磐井が言うには、かつてお前と一緒に同じ器で食べたじゃないか、と言っていますね。つまり毛野とは同等でも、天皇とは同格とは言っていないんです。筑紫君磐井は、ヤマト王権に出仕していたのです。

そういう意味では、江田船山古墳出土の大刀銘にある典曹人も、天皇に仕え奉る関係です。対等な関係ではありません。磐井も、毛野に対しては対等であるので、命令するのはけしからん、というわけです。毛野の方は、天皇の命令で筑紫に来るわけです。かつては同等であっても、天皇の命令を代言するわけだから、上下関係になります。そして、戦いが始まるというように展開します。

こうしたことは、その通りではないかと思います。たとえば、前方後円墳を造る際も、天皇とは対等の関係ではないでしょう。「磐井の戦争」と呼ぶ人もいますが、戦争は対等だといえますが、磐井は中央に対して反乱の意志を持っていたでしょう。毛野が將軍として筑紫に来るのは、天皇の代理でしょう。

五世紀後半になると、典曹人とか杖刀人として中央に出仕します。僕は、これらを「人制ひとせい」と呼んでいます。その後、部民制にかわりますが、もう少し隷属度が強まっているのではないのでしょうか。ヤマト王権における分業の一部を氏うぢの名として名のるのが「部」ですから。そこから、後の律令制の下級官人、品部・雑戸になるような人たちが出てきます。部は、欽明朝には存在しています。

佐藤

一点、吉村さんにお尋ねしたいのですが、磐井の戦いの時に、磐井は、高句麗、百済、新羅、加那からの外交使節を、瀬戸内海から向こうに行かさないで、自分のところで全部受け止めてしまったと日本書紀には書いてあります。



佐藤 信



吉村 武彦



溝口 優樹

吉村

そうですね。新羅からの働きかけで、賄賂を受け取っています。五、六世紀においては、半島諸国と中央との外交関係があっても、地方豪族が半島とのルートを持っていたもおかしくないですね。中国は別にしまして。そうでないと、たとえば日本海側で半島産のいろんな遺物が出てくるのは理解しづらいですね。すべて中央のヤマトを介して入ってくるとも、考えにくい。考古学的には。

亀田（修）

まさに、おっしゃっている通りだと思います。特に、岡山は五世紀前半に造山古墳が築かれます。一応、日本の前方後円墳の中ではナンバー4の大きさで、造られた時代に限ると、2番目の大きさになります。その造山の周辺には、実は熊本^の宇土半島の石棺が行っているんですね（造山古墳前方

部におかれた石棺）。その横に千足古墳があるんですけども、その文様を描いている石は、天草の砂岩であるという分析結果も出ています。それから石室の構造も宇土半島の付け根のものとよく似ています。

その中でよく言っていますのは、造山古墳の前方後円墳という形は当然ヤマトの王権との関わりの中で存在するということです。一方で、熊本との関係をすべて王権の下での動きと見るのか、というとそうではなくて、やっぱり熊本とそれなりの独自の関係を持っているのではないのでしょうか。

さらに、造山古墳のすぐ横に榊山古墳という、馬形帯鉤^{うまがたいこう}とか、朝鮮半島と関わるものをたくさん持っている古墳があります。四世紀の終わりから五世紀初めの頃の、朝鮮半島南部地域の混乱にヤマトの王権が関与し、地方の豪族たちも関与したと思っています。吉備もその一連の動きの中で朝鮮半島



亀田 修一



村崎 孝宏



亀田 学

に行き、加耶の人たちを受け入れたと思っています。このような動きは北部九州でもあったと思います。

ただ、岡山には造山古墳、作山古墳、両宮山古墳といって、二〇〇mを超える巨大な前方後円墳が3つあるんですが、ちょうどその後くらいの、四六三年に、吉備の反乱伝承が記録に出てきます。これにつきましては、やはり吉備は力を持ち過ぎたので、王権側から睨まれたのではないかと思っています。そうして王権に抑え込まれていって、六世紀半ばの白猪屯倉・児島屯倉設置に至ると思っています。同じことが筑紫君磐井にも起こったのではないかと考えています。つまり五世紀の後半段階にようやくヤマト王権は、吉備まではかなり抑え込める状況になり、六世紀の前半になる頃までは、筑紫までは完全に抑え込めてない状況だったんじゃないかと思っています。

佐藤

九州でも、ヤマト王権とほとんど結び付くと言えば、宗像氏もそうだと思います。そういう勢力もいるし、ヤマト王権と対抗的な立場に立つものもいて、それを制圧しながら集権的な体制が営まれていったということかな、と私も思います。

その場合、各地方豪族の在り方というのは一元的ではない、多元的な、多方向との交流の中で、それぞれ、自らの統ぶるところを確実に把握するということを目指していた。これは江田船山の大刀銘文です。あとは、子孫の繁栄とか、そういう目的が書いてあるわけです。大王権力との関係とか、あ

るいは隣の強力な勢力との関係とか、あるいは朝鮮半島との関係とか、多元的に見なくてはいけないのではということが、今のお話を伺っていたしました。

それでは三番目のテーマで、「鞠智城と肥後の地域社会」ということを最後に考えたいと思います。今回のテーマは「地域社会からさぐる古代山城・鞠智城」ということでありまして、私、今日はご報告を伺って本当におもしろく、いろいろなことを学ばせていただきました。ただ、まとめとしては、やはり「多元的です」ということで、すっきりとした結論にはなかなかいきません。これから、もう少しこういうところを抑えたほうがいい、という点、あるいは今日、吉村さんから豪族居館はなかったのか、というお話があったわけです。そういう意味で言うと、地域社会と鞠智城の関係について、こういうところをもっと分かってくれば全体的な姿が見えてくるのではないか、ということについてお聞かせください。まずは亀田学さん、お願いします。

亀田 (学)

今日発表をさせていただいて、溝口先生の文献からの地域史と整合することがあるということを指摘いただきました。それが成果だと思っています。発表するにあたっては、近隣の集落とかというのを調べたけどなかなかよく分からないこともありました。古墳時代も含め、特に七世紀後半から八世紀の中くらいまでの様相がちょっと分かりにくいので、過去に調査したものもあるので、改めてご報告させていただきます。

佐藤

ちよつと質問なのですが、鞠智城の南の台^{うへ}台地に、私はそれくらいの時代の集落とか、あるいは、周辺の斜面に横穴があると思っていたのですが、ちよつとずれる、ということでしょうか。

亀田（学）

横穴はだいたい七世紀中ごろまではいくんですが、それ以降はどうかのかなというところもあります。集落の消長表もあったんですけど、八世紀後半くらいの遺構では、土器は少し出土しているので、それ以前の遺構があまり見つかっていないんです。一部、菊池川下流域に小^お田^だ宮^{みや}の前^{まえ}遺跡とか、いろんな遺跡はあるんですけども。調査例や土器などを細かく見ていかないといけないというふうに思っています。

佐藤

土器がたくさん出土する鞠智城の造営期も含めて、その時代に、周辺の人々がどこに住んでいたかは、まだなかなか分かっていないのですか。

亀田（学）

鞠智城の時代の集落というか、たくさん出るところはほとんどなくて。立願寺廃寺とかはもちろん重なってくると思うんですけど、他にあまりいい例がないんですね。それと、六世紀後半に集落があります、それを支える時期の周辺の集落は分からない状況です。クニの成立ということを考える

と古墳を含めて七世紀代の遺跡がわかればいいと考えています。古墳も、横穴式石室や横穴群だと、遺物が出土するのは限られてくるので、時期を推定するのは難しいです。佐藤先生がおっしゃったように、八世紀まで使われている横穴もあるとは思いますが、それが具体的にどの地域かというのはなかなか分からないところがあります。今後の鞠智城の中の調査もそうなんですけど、もちろん、鞠智城の時代に墓がないというわけじゃないと思いますので、周辺の横穴墓なども、遺物がなければ形態的に分類できるのか、再利用した痕跡が残っているのかも含めて考えなければと思います。

佐藤

鞠智城から西南にかけて条里制の区画がずいぶん展開していますが、あれも、鞠智城が機能している時と並行していると私は思っていたのですけれども、そのへんもあまり分かっていない？

亀田（学）

ほとんど調査をしていけませんので、条里の方向が一部変わっているところはあるので時期差はもちろんあると思うんですけども。水田の調査が、菊池川下流域の新玉名駅の周辺で一部あるくらいです。今後どこまで低湿地のところが開発できたか、いつの時代なのか。やっぱり八世紀後半くらいには画期があるので、それ以前がどうだったのが課題です。また水田がどこまで広がるのか、丘陵のすぐ下の部分については米は作られていると思うんですけども、条里の中央部というか、一番低湿地の部分にどこまで開発されたかというのは、なかなか現状では難しいと考えています。

佐藤

次に、村崎さん。

村崎

鞠智城の築城に関わった集落がどこにあるのかという問題になると、なかなか難しい部分があります。先ほどから話に出ているうてな遺跡が、もともと南側、大地の裾部にありますので可能性としては高いんだらうと思うんです。ただ、うてな遺跡の舌状に伸びた台地の縁を、一万五千平米ほど、圃場整備で調査をしています。その調査区の中ほどで道路跡が見つっていますが、それよりも東側に關してはほぼ分からないという状態です。ですから、そこに集落がさらに広がっているのかどうかということも今後の課題でしょうし、台地の裾にある瀬戸口横穴群に関しても、現状、調査が行われた部分だけでいくと、新しいものでも七世紀の中ごろまでいかにないだらうと思うんですね。前半くらいで終わってしまう。ですから、築城の時期まで少し届かない。ただ瀬戸口横穴群をすべて掘りつくしているわけではないので、今後さらに見つかるもの、あるいは消滅してしまったものの中にそういうものがないかどうか、というのが一つの課題になってくるのかな、と考えています。

ただ、そういうところだけではなくて、鞠智城そのものの築城の技術を、鬼ノ城の調査事例の中で、大陸系の技術がどんどん改変をされていきながら見えてくる、ということはすごく参考になると思います。鞠智城の場合、築城時期は分からないんですが、繕治の記事は『続日本紀』に出てきます。そ

の繕治した段階の技術って何だろう、その前の段階の技術とどう違うのか。さらにその後三〇〇年続く中でどういうふうに変更されていくのか、というのがなかなか見えてこない。建造物そのものの変遷としては、こういうふうに存在しますよ、というのが大まかには示されていますが、城全体の中の土塁だとか門だとか、そういう部分での技術の変遷というのはなかなか追えていない。残りが悪い、というのも一つはあるのかもしれませんが、今後、土塁線の中で、修復の技術、痕跡が見つからないか、そういうところも含めてしっかりと見ていけたらなと思っています。そうすることで、他の古代山城との比較がより明確にできていくんじゃないかなと思いますので、その点は今後の課題かなと思います。

佐藤

ありがとうございます。では、亀田修一さん。

亀田（修）

今回の場合、地域社会との関係ですが、亀田学さんもおっしゃっていましたが、これまで放っていた資料の再検討をやっていただと、特に遺物で、当時は気が付かなかったけれど、改めて見直すとかかなり興味深いものがあるんじゃないか、ということはあるかと思っています。

あとは年代観の問題です。例えば、三〇年前に掘った時はこう思っていたけど、今なら年代がちょっとあがるとか下がるとか、そういうことも当然ございます。それから、遺構の見方に関しても、当

時は気付かなかったけどこの建物はつながるんじゃないかと。これまでの成果の再検討は必要かと思えます。それから、もし新しく掘れるのなら、鞠智城跡周辺の関連しそうな横穴墓やお寺の横など、機会があつて、そのような意識をもつて調査研究していただくと、何か新しく見えてくるのかなという気はいたしております。

それともう一つ、これは村崎さんもおっしゃっていますが、僕は鞠智城に関してもまだまだ調査は足りないと思います。分からないことが多いと思っています。今日見せていただいた部分で、石が並んでいて、版築の仕方に関しても上と下が違っていましたよね。ああいうのもちゃんと出ていますので、やはり、地味なことなんですけどきちっと調査をやっていけば、また新しい情報が提示できるんじゃないかと思っています。特に貯水施設をもう一度掘ってほしい。新たな文字史料が出たら、もう少し違った話ができると思うんです。ぜひとも。土手の作り方に関しましても、おそらく敷粗朶技法などが入っている可能性は十分あると思います。そういうのも意図的に掘られて、探し出すということとは必要なのかなと思います。門も当然大事ですし、土塁もそうなんですけれども、やっぱりポイントとなるとはぜひとも今後視野に入れて調査してほしいと思います。それで年代に関わるものが出るのか、そういうことになれば、今、熊本県の方々が期待されている話も動くんだと、僕は思っています。そういう意味で、ぜひとも池の中をお願いします。

佐藤

貯水池からは、木簡とか、百済の金銅仏がこれまでも出土しているということ。文字史料が出てくればずいぶん変わってくるかなと思います。では吉村さんお願いします。

吉村

朝鮮式山城を考えると、どうしても白村江の敗戦を起点として考えていました。そうすると、鞠智城の場合は、他の山城が廃止されても残るわけですね。それが一体どういうことなのか、と考え直しました。もともと日本列島では、夷狄や蕃国に対してどういう政策を持っていたのか、ということです。そこで原理原則というか、律令法でどうなっているのか。律令法にいう「辺要」という概念で、整理し直したのです。

また、九州国立博物館の小嶋篤さんが、『大宰府の軍備に関する考古学的研究』（九州国立博物館）を発表されています。読みますと、七世紀後半の時期なのですが、九州北部には東北地方の製鉄工房と共通するような遺跡があると指摘されています。つまり東北と北部九州で、製鉄工房が同じだという。

小嶋説によれば、防御対策ということになると思いますが、蝦夷に対して武器製作と関連する製鉄工房の整備が必要だということでしょう。そうすると、九州北部でも蝦夷対策と同じように、蕃国や隼人対策において、東北と同じ製鉄工房が造られたことになります。製鉄工房が共通することを明らかにされたことは、蕃国・隼人対策において重要なことです。七世紀後半という指摘で、あまり細か

い時期は区分されていませんが、もし成立すれば、蕃国・夷狄に対して共通の政策となります。

七世紀半ばの大化改新の時は、史料の残り方の問題があつて、東北では日本海側の磐舟柵と淳足柵の記事はありますが、太平洋側は出てこない。しかしながら、考古学の発掘調査で、郡山遺跡が出てきています。九州の場合も何も残っていませんが、残っていないということは何もなかったということでしょうか。蝦夷の場合は、『書紀』に「東国国司の詔」がありまして、対蝦夷策は武器収公との関係で蝦夷のことが少しわかります。

井上光貞さんは、東国に越は入っていないという考えです。しかし、越が東国でなくても、『書紀』には淳足柵や磐舟柵の記述があります。それでは、九州の筑紫ではどうなのか、ということが気になりました。九州では、筑紫大宰のことが『書紀』孝徳紀に出てきます。

大化改新時から、律令制的政策をやっているとは考えられませんが、やはり七世紀半ばになると、対蝦夷策や隼人策、あるいは大陸や半島との外交政策が出されてもおかしくないと思います。孝徳朝の施策が、まだよく分からないということは事実です。

さらに西日本防衛ラインは、八世紀初めになります。亀田修一さんは、山城が全部完成したとは限らないと指摘されています。史料で山城を築くと書いてあれば、完成したと思ひ込むことが多いのですが、完成していなくてもおかしくありません。

ということは、鞠智城が残っているということは、それなりの理由があるわけです。しかも、性格が変わることもありえます。そのため隼人研究をやることにしました。隼人関係の史料は、令集解や日本書紀・続日本紀のデータベースを調べますと、ある程度わかります。それらを見ますと、皆さんやられています、確かに隼人政策に変化があることがわかりました。ある時期に変わったということですね。

また、鞠智城は誰が維持するのかということを考えると、兵士や防人の参加が問題になります。ただし、意外にも防人や兵士の制度自体の研究はされていますが、地域に根ざした研究は少ないのです。確かに難しい問題です。鞠智城では、兵士がどこまで関係しているのか、史料がないので何とも言えないですね。

ただし、軍防令を見る限り、兵士がいないと城柵関係の維持はできません。そういう意味では、兵士とか防人も地域に根ざした研究が必要です。肥後国では益城軍団しか史料はありませんが。鞠智城では、池の遺構を調査すると、新史料が出てくるかもしれません。何か新しい文字史料が欲しいですね。

さらにもう一つ。鞠智城を造る問題です。「古代山城築城の技術的基礎」とレジュメに書きましたが、百濟から技術者が来ないと築城できないということはあると思いますが、それまでの古墳を造る技術とか、あるいは豪族居館にともなう技術もあるわけですね。そういう技術を前提にして、渡来系の技術者が指導するということになると思います。そのあたりも注意したいんです。

考古学は素人ですが、朝鮮式山城の水門などを見ますと、古墳との共通した技術も分かります。そういう意味では、ぜひ豪族居館も見つけていただきたい。国造居館になると、発見はもっと難しいでしょう。群馬では、三ツ寺I遺跡が復元されています。そういうところを見ますと、政治的拠点との関係のほか、水の施設など共通する要素もあるのではないのでしょうか。

古代山城の築城で、百済からの技術はどの部分に大きな役割があり、そうして山城ができたとか、具体的に述べてもらえば分かりやすいですね。すでに解明されているのかもしれないが。

今日のお話を聞けば、できましたら肥後国だけではなく、肥前と肥後国を一緒に研究した方が、両国の共通性と差異がよく分かるかと思います。さらに筑後の方もやっていただければおもしろい。ないものねだりが多くなりました。

佐藤

ありがとうございました。それでは、溝口さんお願いします。

溝口

地域の人々との関わりというのを考えてみたわけですが、やはり、秦人のことが気になっていて。秦氏や秦人というのは、例えば茨田堤^{まんだつみ}を作るのに使われたとか、葛野大堰^{かどの おおぜき}を作ったとか、あるいは、恭仁宮の垣を作ったとか、そういう話は伝承も含めてあるので、そういう関わりからすると、秦人が果たした役割もあるのかなという気がしています。何か考古学的に確かめられるとおもしろい

なと思いました。

亀田修一さんのお話でも、鬼ノ城のほうは、どちらかというと漢人の分布が濃密な地域なんだけれども、秦も関わっていいような感じがする、ということでしたので、別に秦に限らなくてもいいのかもしれないけれども、考古学的に確かめられたらおもしろいな、というのが一つ。

それから、私の方法としては、分布氏族を復原して、なぜそういう氏族がそこにいるのか、その事情をひも解いていくというスタイルでやってみたわけですが、とにかく、分かる氏族が少ないというのが、なかなか大変なところです。考古学的な調査研究の成果を見ると、古墳の動態なんかはかなり詳しく分かっているみたいなので、もう少し氏族のあり方が分かってくると突き合せることができます、おもしろくなるのかなと思います。かと言って、文献史料が増えるとも思いませんけども、やはり出土資料、特に墨書土器なんかは見つかる可能性があるんじゃないかという気がしていますので、期待しています。

佐藤

お隣の玉名郡では、今は失われているけれど、郡司層の墓誌が出土していましたよね。今後の文字資料に期待したいな、と思います。

ありがとうございます。今日、皆さんのご報告とお話を承りながら、鞠智城の調査研究には、これから多くの成果を上げ得るテーマが、まだ前に広がっているなと思いました。特に今日のように、

考古学と古代史の両面から歴史的な意義づけに迫れるというのは、すごくいいテーマだと思います。

また、今日、こういう調査もしていただきたいとか、ここも掘ってほしいという話もあったわけですが、あるいは、これまでの調査成果を再整理することなども確かに大きな課題です。こういった調査研究の豊かな課題は、前にたくさん広がっているのです、それを今後とも一つずつ抑えていって、鞠智城の価値を明らかにするということが、鞠智城の価値を高めることにつながるのではないかと思います。

今後ともぜひ、熊本県では鞠智城の調査研究も積極的に進めていただければと思います。

本日はお忙しいところ、また、コロナの状況のもとでこのような形になりましたけれども、お集まりいただいて大変有益な話をしていただきまして、どうもありがとうございます。